

野口 芙美

相手の発話に対する否定応答は、相手のフェイスを侵害する可能性のある行為であり、相手と良好な関係を保ちコミュニケーションを円滑に行うためには適切な表現の使用や相手への配慮行動が求められる。しかし、否定応答研究は応答詞に注目したものが中心で、それ以外の形式や配慮行動についてはほとんど明らかにされていない。本論文は、自然会話を対象に否定応答表現全体を概観することを目的とする。そして、非母語話者にとってわかりにくいと言われるのはなぜか、その要因を分析した。

第 1 章では、先行研究を概観し上記のような問題点を指摘した。また、これまで「いいえ」系応答詞との呼称が幅広く用いられ、否定応答詞と呼ぶことが避けられていた四つの応答詞について、それぞれの否定の対象や否定の度合いの大小に違いはあっても何らかの否定がなされているという立場を明らかにした。

第 2 章では、明治・大正期において、「いや」「いえ」「いいえ」「ううん」四つの応答詞がどのように使分けられていたのかを『日本語歴史コーパス』を用いて調査し、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』との比較や歴史的変遷を見た。その結果、「いいえ」が出現以降、一時的には「いえ」を抜いて頻繁に使用された後に減少傾向に転じたことを明らかにした。さらに、近代では現在「いや」に特徴的な用法が他の応答詞にも見られたことから、現代に比べ他の 3 つの応答詞の使用範囲が広がったと結論付けた。また、話し言葉と書き言葉の違いについても言及しそれぞれの特徴を挙げた。

第 3 章では、話者の性に偏りのないデータを用いての四つの応答詞の使用実態を改めて調査し、性差という観点から分析を試みた。その結果、否定応答詞使用は男性が女性を多く上回る結果となった。また、「いや」は男性、「ううん」は女性に多いという、使用者の性によって用いられる応答詞に差があることがわかった。そして、性差との関連付けがなされる丁寧度についても分析した結果、「いえ」「いいえ」は敬体での使用、「ううん」は常体での使用の割合が高く、「いえ」「いいえ」の丁寧度の高さが裏付けられる結果となったが、どちらも必ずしも特定の文末形式と共起するわけではないこともわかった。さらに、最も多く使用される「いや」は敬体でも常体でも使用されることを明らかにした。

第 4 章では、応答詞を用いない否定のほうが多いという先行研究を受け、応答詞以外の否定応答表現にはどのようなものが考えられるのかを検討した。否定応答表現の定義を行い、先行文との関連からの分類と、応答文そのものの表現形式の面から分類を提案した。先行文との関連による分類は、それまでの先行研究をもとに再分類し直し、さらに否定の対象や否定応答の負担度という観点を分類に追加した。応答文の表現形式分類は、文そのものに否定の意味があるかないかで二分し、さらに 7 種類の形式に細分化した。

第 5 章では、真偽疑問文に対する否定応答に焦点を当て、第 4 章で提案した分類を用いて使用実態を調査した。その結果、形式として最も多く用いられたのは、語用論的な否定とも言える形式で文脈の理解が求められることがわかった。さらに、形式が単独で用いられたか否かに着目した結果、過半数が単独ではなく肯定を含め複数の形式を用いていることが明らかになった。否定の意味を持つ形式での否定の特徴として、フィラー、笑い、共話といった相手への配慮と考えられるストラテジーが用いられていたことは興味深い実態であった。

第 6 章では、応答表現が相手との関係性に影響を受けるかどうかを検討するため、相手との年齢差に

注目して真偽疑問文に対する否定応答を分析した。その際、ポライトネスの観点からどのようなストラテジーが用いられているのかを、対年上、対同年、対年下で見た。その結果、相手との年齢差によって用いられやすいストラテジーの傾向は異なることがわかった。また、年齢差のない相手には直接的な形式を用いるのに対し、年齢差がある場合には直接的な形式を用いにくいことを指摘した。

終章では、結論として四つの否定応答詞の特性とその役割について言及した。話し言葉・書き言葉両方で「いや」が圧倒的に多く用いられるのはなぜなのか、「いや」の曖昧性に要因があるとして見解を述べた。また、日本語教科書で「いいえ」の提示が一般的になっている点について、「質問に対する否定＝いいえ」という日本語母語話者の規範意識が強いことを要因に挙げ、その背景には意味や機能が狭く限定的な「いいえ」の性質にあることを指摘した。

また、本研究のまとめとして、日本語母語話者の否定応答がなぜ非母語話者にわかりにくいと言われているのか、それにも関わらず母語話者同士ではなぜミスコミュニケーションが起きにくいのかについて検討した。その上で、多文化共生社会において、母語話者に求められる歩み寄りについて提案を行った。